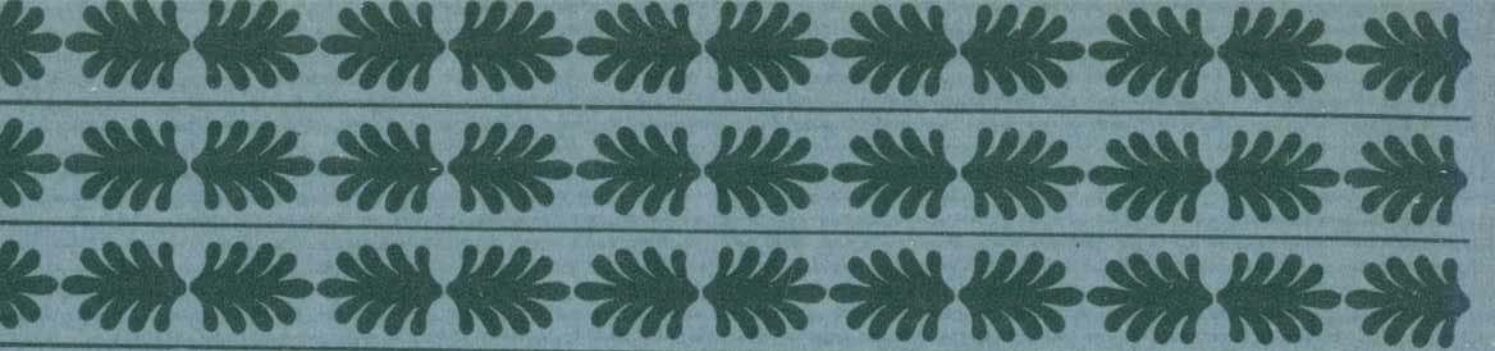
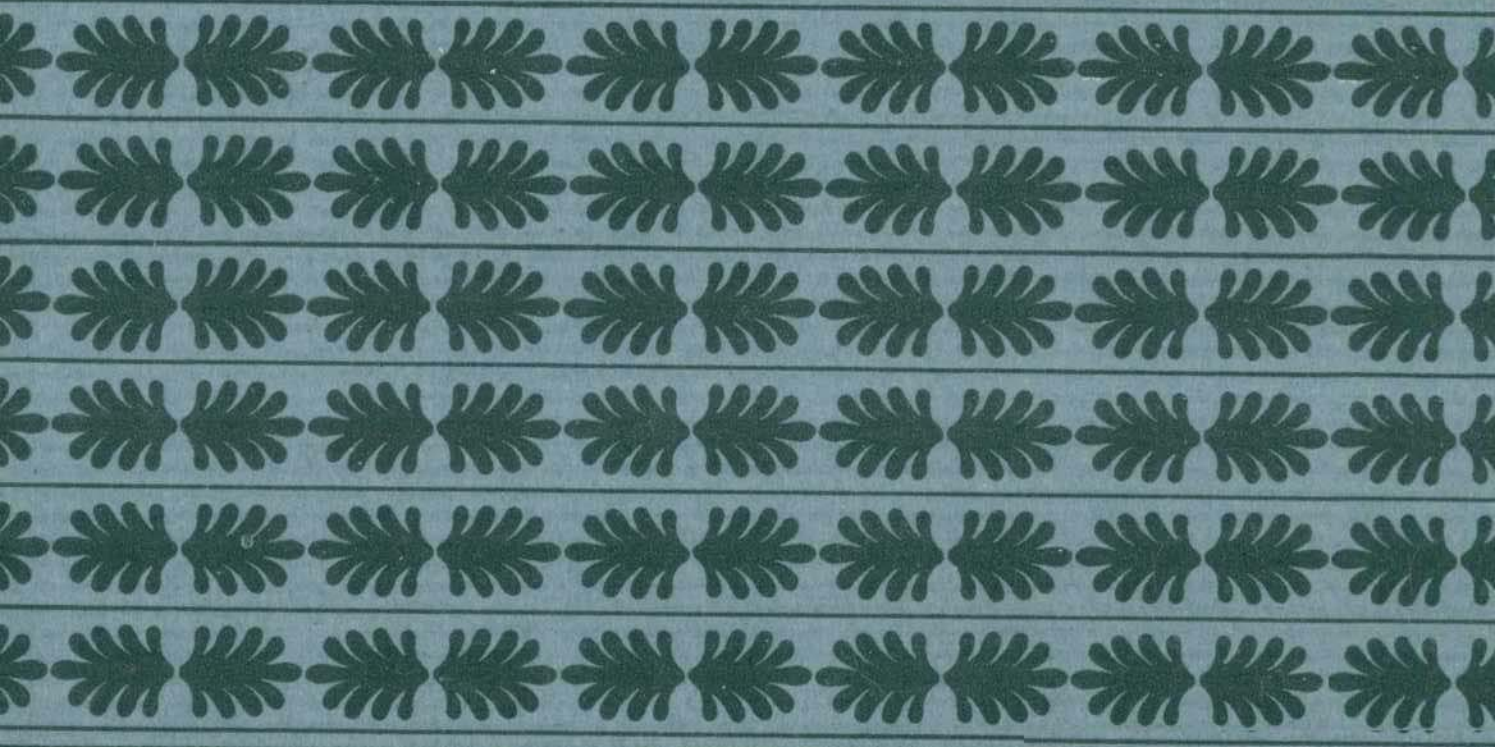


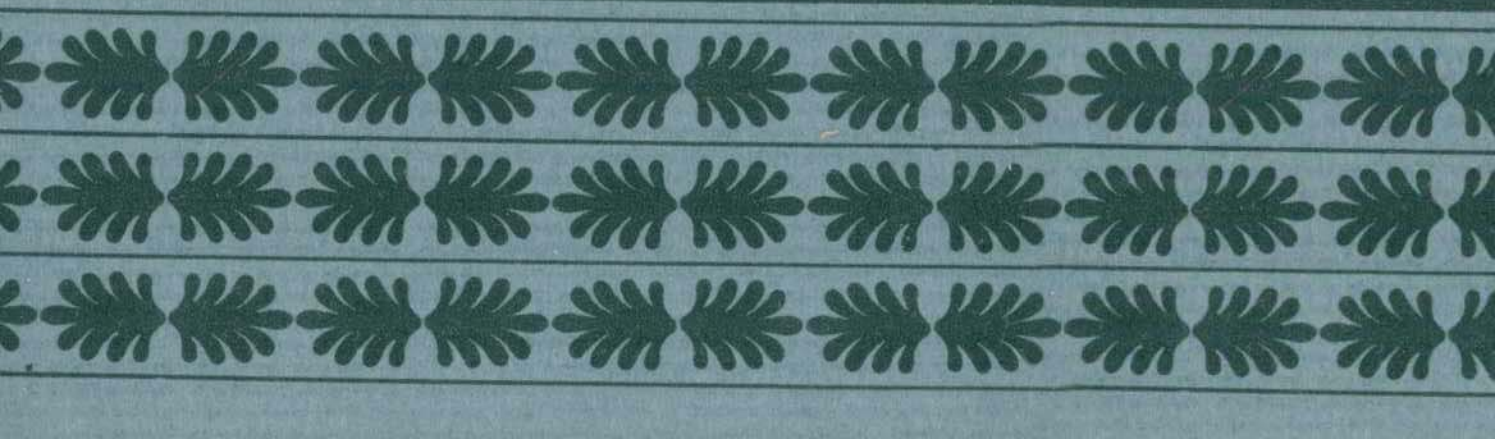


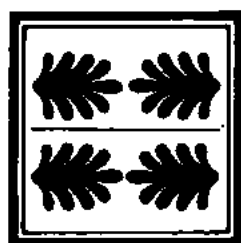
斜陽

太宰 治



講談社文庫





講談社文庫

しやよう
斜陽

だ さい おさむ
太宰 治

昭和46年10月15日第1刷発行

昭和56年3月31日第24刷発行

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

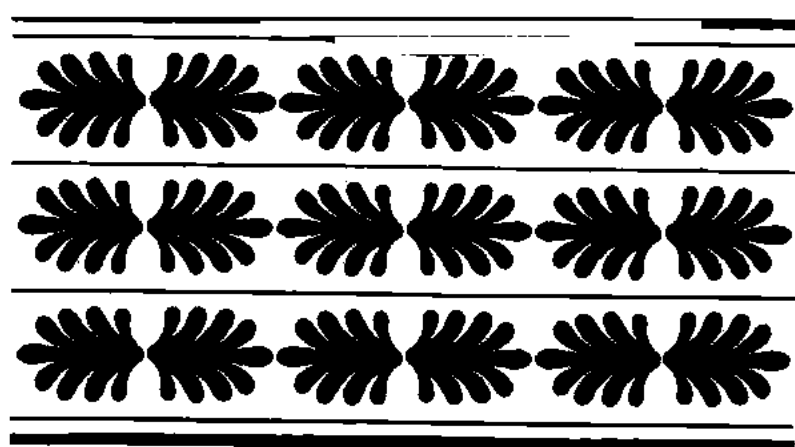
製 本 株式会社大進堂

© Michiko Tsushima 1971

Printed in Japan

0193-310476-2253(1) 定価 180円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)



講談社

本書は、原著の文字づかいを尊重しながら、現代表記（新字・新かな）に改めた。

〈編集部〉

目次

斜陽

五

年譜
解說

奧野健男

一七四
一九四

斜

陽

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ。」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ。」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口にし込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張ではない。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしやる。弟の直治がいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向ってこう言った事がある。

「爵位があるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持っている立派な貴族のひとつもあるし、おれたちのように爵位だけは持っていない、貴族どころ

か、賤民にちかいのもいる。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊廓の客引き番頭よりも、もっとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしよう、タキシードなんか着て、なんだってまた、タキシードなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げつとなった。気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあったものだけでも、じっさい華族なんてもものの大部分は、高等御乞食とでもいったようなものなんだ。しんの貴族はあんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある。」

スウプのいただきかたにしても、私たちなら、お皿の上にすこしうつむき、そうしてスプウンを横に持ってスウプを掬い、スプウンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけでも、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁にかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をちゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプウンを横にしてさつと掬って、それから、燕のように、とても形容したいくらいに軽く鮮やかにスプウンをお口と直角になるように持ち運んで、スプウンの尖端から、スウプをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見などなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプウンをあつかい、スウプを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちつともお立てにならぬのだ。それは所謂正式礼

法にかなったいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、うつむいてスプウンの横から吸うよりは、ゆったり上半身を起して、スプウンの尖端からお口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども私は直治の言うような高等御乞食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作にスプウンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、所謂正式札法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スウプに限らず、お母さまのお食事のいただき方は、頗る^{すぶ}札法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、さっさと全部小さく切りわけてしまつて、それからナイフを捨て、フォークを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆっくり楽しそうに召し上つていらつしやる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひよいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらつしやる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違つたものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜のハムやソーセージなども、ひよいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。

「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ。」

とおっしゃつた事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があるけれど、私のような高等御食が、下手に真似してそれをやったら、それこそほんものの乞食の図になってしまいそうな気がするので我慢している。

弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさへ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐の嫁入りと鼠の嫁入りとは、お嫁のお支度がどうちがうか、など笑いながら話し合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍の萩はぎのしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もっとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん。」
とおっしゃった。

「お花を折っていらっしゃる。」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ。」

とおっしゃった。

ちつともしやがんでいらっしゃらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあった。

けきのスウプの事から、ずいぶん脱線しちゃったけれど、こないだ或る本で読んで、ルイ王朝

の頃の貴婦人たちは、宮殿のお庭や、それから廊下の隅などで、平気でおしっこをしていたという事を知り、その無心さが、本当に可愛らしく、私のお母さまなども、そのようなほんものの貴婦人の最後のひとりなのではなからうかと考えた。

さて、けさは、スープを一さじお吸いになって、あ、と小さい声をお挙げになったので、髪の毛？ とおたずねすると、いいえ、とお答えになる。

「塩辛かったかしら。」

けさのスープは、こないだアメリカから配給になった罐詰のグリーンピースを裏ごしして、私がポタージュみたいにしたもので、もともと料理には自信が無いので、お母さまに、いいえ、と言われても、なおも、はらはらしてそうたずねた。

「お上手に出来ました。」

お母さまは、まじめにそう言い、スープをすまして、それからお海苔で包んだおむすびを手でつまんでおあがりになった。

私は小さい時から、朝ごはんがおいしくなく、十時頃にならなければ、おなかですかないので、その時も、スープだけはどうかやりましたけれども、食べるのがたいぎで、おむすびをお皿に載せて、それにお箸を突込み、ぐしゃぐしゃにこわして、それから、その一かけらをお箸でつまみ上げ、お母さまがスープを召し上げる時のスプーンみたいに、お箸をお口と直角にして、まるで小鳥に餌をやるような工合にお口に押し込み、のろのろといただいているうちに、お母さまはもうお食事を全部すましてしまって、そっとお立ちになり、朝日の当たっている壁にお背中をも

たせかけ、しばらく黙って私のお食事の仕方を見ていらして、

「かず子は、まだ、駄目なのね。朝御飯が一番おいしくなるようにならなければ。」とおっしゃった。

「お母さまは？　おいしいの？」

「そりやもう、私はもう病人じゃないもの。」

「かず子だって、病人じゃないわ。」

「だめだめ。」

お母さまは、淋しそうに笑って首を振った。

私は五年前に、肺病という事になって、寝込んだ事があったけれども、あれは、わがまま病だったという事を私は知っている。けれども、お母さまのこないだの御病気は、あれこそ本当に心配な、哀^{かな}しい御病気だった。なのに、お母さまは、私の事ばかり心配していらっしゃる。

「あ。」

と私が言った。

「なに？」

とこんどは、お母さまのほうでたずねる。

顔を見合せ、何か、すっかりわかり合ったものを感じて、うふふと私が笑うと、お母さまも、にっこりお笑いになった。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出

るものなのだ。私の胸に、いま出し抜けにふうっと、六年前の私の離婚の時の事が色あざやかに思い浮んで来て、たまらなくなり、思わず、あ、と言ってしまったのだが、お母さまの場合は、どうなのだろう。まさかお母さまに、私のような恥ずかしい過去があるわけは無し、いや、それとも、何か。

「お母さまも、さっき、何か思い出しになったのでしょうか？　どんな事？」

「忘れたわ。」

「私の事？」

「いいえ。」

「直治の事？」

「そう、」

と言いかけて、首をかしげ、

「かも知れないわ。」

とおっしゃった。

弟の直治は大学で中途で召集され、南方の島へ行ったのだが、消息が絶えてしまって、終戦になっても行先が不明で、お母さまは、もう直治には逢えないと覚悟している、とおっしゃっているけれども、私は、そんな、「覚悟」なんかした事は一度もない。きっと逢えるとはかり思っている。

「あきらめてしまったつもりなんだけど、おいしいスープをいただいて、直治を思って、たまら

なくなった。もっと、直治に、よくしてやればよかった。」

直治は高等学校にはいった頃から、いやに文学にこつて、ほとんど不良少年みたいな生活をはじめて、どれだけお母さまに御苦労をかけたか、わからないのだ。それだのにお母さまは、スウプを一さじ吸っては直治を思い、あ、とおっしゃる。私はごはんを口に押し込み眼が熱くなった。「大丈夫よ。直治は、大丈夫よ。直治みたいな悪漢は、なかなか死ぬものじゃないわよ。死ぬひとは、きまつて、おとなしくて、綺麗で、やさしいものだわ。直治なんて、棒でたたいたって、死にやしない。」

お母さまは笑って、

「それじゃ、かず子さんは早死にのほうかな。」

と私をからかう。

「あら、どうして？ 私なんか、悪漢のおデコさんですから、八十歳までは大丈夫よ。」

「そうなの？ そんなら、お母さまは、九十歳までは大丈夫ね。」

「ええ、」

と言いかけて、少し困った。悪漢は長生きする。綺麗なひとは早く死ぬ。お母さまは、お綺麗だ。けれども、長生きしてもらいたい。私は頗るすこぶまごついた。

「意地わるね！」

と言ったら、下唇がふるふる震えて来て、涙が眼からあふれて落ちた。

蛇の話をしようかしら。その四、五日前の午後に、近所の子供たちが、お庭の垣の竹藪たけやぶから、蛇の卵を十ばかり見つけて来たのである。

子供たちは、

「蝮まむしの卵だ。」

と言い張った。私はあの竹藪に蝮が十匹も生れては、うっかりお庭にも降りられないと思ったので、

「焼いちゃおう。」

と言うと、子供たちはおどり上って喜び、私のあとからついて来る。

竹藪の近くに、木の葉や柴を積み上げて、それを燃やし、その火の中に卵を一つずつ投げ入れた。卵は、なかなか燃えなかった。子供たちが、更に木の葉や小枝を焰ほのおの上にかぶせて火勢を強くしても、卵は燃えそうもなかった。

下の農家の娘さんが、垣根の外から、

「何をしていらっしやるのですか？」

と笑いながらたずねた。

「蝮の卵を燃やしているのです。蝮が出る、とこわいんですもの。」

「大きさは、どれくらいですか？」

「うずらの卵くらいで、真白なんです。」